

壁塗り代換における位置変化用法と状態変化用法の 関係について

—多義との違いは何か—

On the relationship between change-of-location and change-of-state meanings of locative alternation verbs: How alternating verbs are different from polysemous verbs

川野 靖子*

KAWANO Yasuko

「塗る」等の動詞は、「壁にペンキを塗る／壁をペンキで塗る」のように、格体制の交替を起こす。従来から指摘されているように、こうした交替動詞は位置変化と状態変化の2つの意味を持つと考えられる。

しかし一方で、交替動詞が表す位置変化の意味（e.g., 壁にペンキを塗る）と状態変化の意味（e.g., 壁をペンキで塗る）は、「別義」と言うには似すぎていることから、通常が多義語における意味間の関係とは異なる関係にあると考えられる。本稿では、それが具体的にどう異なるのかを考察し、以下のことを指摘した。

交替動詞：「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は現実世界の同一事態を指示している。

両表現の意味の違いは、その同一事態を位置変化として捉えているのか、状態変化として捉えているのか、という点にある。

多義語：多義語の各意味が指示する事態は、関連はするが同一事態ではなく、別の事態である。

上記のように多義語との違いを詳らかにすることにより、交替動詞の特徴を明確にした。

キーワード：場所格交替、メトニミー、格体制の交替現象

1. はじめに

次の(1)が示すように、「塗る」という動詞は、～ニ～ヲという格体制と、～ヲ～デという格体制をとり、しかもその2文がよく似た意味になるという現象を起こす。

(1)a. 壁にペンキを塗る (～ニ～ヲ形)

b. 壁をペンキで塗る (～ヲ～デ形)

また、次の(2)や(3)が示すように、「満たす」や「巻く」等の動詞も、これと同じ現象を起こす。

* かわの・やすこ、埼玉大学教養学部准教授、日本語学

- (2)a. グラスに水を満たす (～ニ～ヲ形)
 b. グラスを水で満たす (～ヲ～デ形)
 (3)a. 腕に包帯を巻く (～ニ～ヲ形)
 b. 腕を包帯で巻く (～ヲ～デ形)

このような格体制の交替現象は、「壁塗り代換」（あるいは、「壁塗り交替」「場所格交替」等）と呼ばれている¹。

本稿では、壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形が、どのような意味的關係にあるのかを考察する。

壁塗り代換の～ニ～ヲ形 (e.g., 壁にペンキを塗る) と～ヲ～デ形 (e.g., 壁をペンキで塗る) は、一見、同じ意味を表すように見えるが、実際には意味類型が異なると考えられる。詳しくは2節で述べるが、このことは既に先行研究でも指摘されており、～ニ～ヲ形は位置変化を、～ヲ～デ形は状態変化を表すと考えられている。つまり、壁塗り代換を起こす「塗る」等の動詞（以下、これらを「交替動詞」と呼ぶ）は、位置変化用法と状態変化用法の2つの意味を持つということである。

それでは、「交替動詞は多義語だ」ということになるのだろうか（壁塗り代換は、動詞の多義性によって成立する現象なのだろうか）。次の(4)と(5)を比べてみてほしい。

- (4)a. この味噌は甘い
 b. 彼は娘に甘い
 (5)a. 壁にペンキを塗る
 b. 壁をペンキで塗る

(4)の「甘い」は多義語の例である。同じ「甘い」という語であるものの、(4a)の「甘い」と(4b)の「甘い」では、意味が異なることは明らかである。これに対し、(5a)の「塗る」と(5b)の「塗る」が表す意味はよく似ており、(4a)と(4b)の間にあるような意味の隔たりが感じられない。このような特徴を持つ「塗る」は、果たして多義語になるのだろうか。

本稿では、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の關係は、多義語における意味間の關係とは異なるという見解を提示する。その上で、次の(6)の問いについて考察する。

¹ 壁塗り代換を取り上げている研究には、奥津(1980)(1981)、國廣(1980)、Kageyama(1980)、Fukui. et al (1985)、定延(1993)、安(1996)、川野(1997)(2002)(2006)(2009)(2016)(2017)、岸本(2001)(2007)、井島(2005)、Iwata(2008)、高見・久野(2014)、Kawano(2019)等がある。また、「壁塗り代換」等の名称は用いていないが、宮島(1972)、奥田(1976)、森田(1989)、西村(2002)等にも、この現象に関する言及がある。

(6) 交替動詞が多義語でないとすると、ではどのような語なのか。そもそも、一般に多義語とされている語における意味間の関係とはどのようなものであり、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の関係は、それとどう異なるのか。

前述のように、交替動詞が位置変化用法と状態変化用法の2つの意味を持つことは、先行研究で指摘されており、ほぼ共通の認識となっている。しかし、「2つの意味を持つということは、交替動詞は多義語ということなのか」「多義語ではないとしたら、多義語における意味間の関係と、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の関係とは、どのように異なるのか」という問題は、これまであまり議論されてこなかった論点であり、曖昧なままだったと思われる。本稿では、この点を追求することにより、交替動詞の特徴を明確にしたいと考える²。

本稿の構成は、次の通りである。まず2節で、交替動詞が位置変化用法と状態変化用法の2つの意味を持つことを確認する。次に3節で、「交替動詞は2つの意味を持つが、しかし多義語とは異なる」という本稿の見解を改めて示す。その上で、4節で、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の関係と、一般的な多義語における意味間の関係とが、具体的にどう異なるのかを考察し、上記(6)の問いへの回答を提示する。さらに5節では、本稿とは見解が異なると思われる研究を取り上げ、それらと比較することにより、本稿の主張を明確にする。最後に6節で考察をまとめる。

2. 「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の意味類型 —位置変化と状態変化—

前述のように、壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は意味類型が異なり、それぞれ位置変化と状態変化を表すと考えられる。「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」の例で言えば、前者がペンキを壁に移動させること（ペンキの位置変化）を表す文であるのに対し、後者は壁の様子を変化させること（壁の状態変化）を表す文である、ということである。このことは、奥田(1976)や奥津(1981)等の先行研究において既に指摘され、多くの研究の共通理解となっているが、本節では、なぜそのように考えられるのかについて、改めて確認しておきたい（なお、意味類型の名称は研究者によって異なる場合があるが、本稿では引用等を除き、「位置変化」「状態変化」という名称に統一する）。

² (6)に示した本稿の問いは、「～ニ～ヲ塗る」の「塗る」と「～ヲ～デ塗る」の「塗る」が同一語であるという認識を前提としている。（同一語であるという認識に立った上で、同じく1つの語が複数の意味を表す「多義語」との違いを考察するものである）。

これに対し、「～ニ～ヲ塗る」の「塗る」と「～ヲ～デ塗る」の「塗る」を別語とした上で、両者は類義関係にあると考える人もいるかもしれない。つまり、「上がる」と「登る」が類義語（似た意味を表す2つの語）であるのと同じように、「～ニ～ヲ塗る」の「塗る」と「～ヲ～デ塗る」の「塗る」も（同形の）類義語である、とする考え方である。

しかし、このような考え方は成り立たないと思われる。類義語と考えた場合、両者は別語ということになるが、別語とするには意味が似すぎているからである。「壁にペンキを塗る」の「塗る」と「壁をペンキで塗る」の「塗る」が、別語としてそれぞれ辞書で立項される、というようなことは、考えにくいだろう。

同じ意味類型に属す動詞は同じ格体制をとり、意味類型が異なれば格体制も異なると考えられる(仁田 1997 等)。したがって、格体制の異なる「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は、意味類型が異なると考えられるのである。

では、それぞれどのような意味類型なのか。～ニ～ヲという格体制をとる動詞には、「付ける」「入れる」「置く」等があり、これらは共通して、位置変化(何かをどこかに位置づけること)を表す(たとえば、下記の(7)は、ブローチを胸に位置づけることを表している)。

- (7) 胸にブローチを付ける
- (8) 箱にボールを入れる
- (9) テーブルに皿を置く

ここから、「～ニ～ヲ塗る」も、これらの動詞と同じく、位置変化を表すと考えられる。

これに対し、～ヲ～デという格体制をとる動詞には、「ふくらます」「汚す」「薄める」等があり、これらは共通して、状態変化(何かの様子を変化させること)を表す(たとえば、下記の(10)は、風船の大きさを変化させることを表している)。

- (10) 風船を空気でふくらます
- (11) 服を泥で汚す
- (12) コーヒーを水で薄める

ここから、「～ヲ～デ塗る」も、これらの動詞と同じく、状態変化を表すと考えられるのである。

以上を整理すると、「塗る」という動詞には位置変化を表す用法と状態変化を表す用法があり、前者が～ニ～ヲ形を、後者が～ヲ～デ形をとる、といえる。「満たす」「巻く」等の、他の交替動詞についても同じことがいえる。

3. 交替動詞は多義語なのか

2 節では、交替動詞が位置変化用法と状態変化用法の 2 つの意味を持つことを確認したが、それでは、交替動詞は多義語ということになるのだろうか。

多義語とは、関連する複数の意味を持つ語のことであるが(國廣 1982、『日本語学大辞典』等)、交替動詞との対比において重要な点は、多義語が表す各意味は、関連はするが別義として認識されるという点だと考えられる。たとえば先に取り上げたように、「甘い」という語は、「この味噌は甘い」のような味覚を表す用法や、「彼は娘に甘い」のような態度を表す用法等を持つ多義語であるが(武藤 2001、小出 2003 等)、「甘い」が表すこれらの意味は、関連はするが違いが明らかであり、別義として捉えられるものである。

これに対し、「塗る」が表す位置変化の意味（e.g., 壁にペンキを塗る）と状態変化の意味（e.g., 壁をペンキで塗る）は、一見、同義に見えるほど、よく似ている（別義とするには似すぎている）。「壁にペンキを塗る」に比べると、「壁をペンキで塗る」の方が、「壁全体に行為が及ぶ」という解釈になりやすいと言われることもあるが（Fukui et al. 1985 等）、奥津(1981)や岸本(2001)が指摘しているように、このような違いが生じるかどうかは文脈等によるところが大きく、常に明確な違いが生じるわけではない。また、仮に、「壁にペンキを塗る」は部分的、「壁をペンキで塗る」は全体的だと感じられたとしても、述べられている行為自体が大きく異なるわけではない。さらに、他の交替動詞にも目を向けてみると、「満たす」のように、行為の及ぶ範囲に関してすら違いを生じない動詞もある（「グラスに水を満たす」も「グラスを水で満たす」も、水を注いでグラス全体に行き渡らせる行為を述べている）。

このように、交替動詞の位置変化用法と状態変化用法は、ほとんど同義と言ってもよいほど、よく似ている。この点で、この2つの意味の関係は、先の「(味噌が) 甘い」と「(娘に) 甘い」のような、一般に多義語とされている語における意味間関係とは異なると考えられるのである。

交替動詞の位置変化用法と状態変化用法の関係が多義とは異なることについて、さらに例を挙げて述べたい。「塗る」には、「壁にペンキを塗る」や「壁をペンキで塗る」が表す塗布の意味の他に、「土、漆喰などをなすりつけて、塀・壁・壇などを築造する（『日本国語大辞典』）」という意味がある（この「築造」の意味は格体制の交替現象には関わらない）。この、築造の意味と、「壁にペンキを塗る」や「壁をペンキで塗る」が表す塗布の意味とは、容易に別義と認定できるものであり、多義の関係にあるといえるだろう（したがって、この築造の意味を考慮に入れば、「塗る」は多義語である。上で引用した『日本国語大辞典』でも、「塗る」の塗布の意味と築造の意味は、別義として語釈が分けられている）。しかし、「壁にペンキを塗る」が表す意味と「壁をペンキで塗る」が表す意味は、同じように多義の関係にあるといえるだろうか。これを多義と考えた場合、先の築造の意味を含めた3つの意味が、「塗る」の意味①、②、③として同等に配列されることになるが、これは明らかに直感に反すると思われる。「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」の間には、塗布の意味と築造の意味との間に見られるような、意味の開きを感じられないからである。

以上に述べてきたように、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の関係は、多義とは異質のものだと考えられる。「～ニ～ヲ塗る」が表す位置変化の意味と、「～ヲ～デ塗る」が表す状態変化の意味とは、同じ語（「塗る」）が表す「関連する複数の意味」ではあるが、その「関連」のあり方が、通常多義語における意味間関係とは異なると考えられるのである。

交替動詞も「関連する複数の意味を持つ語」ではあるから、この点を以て多義語に含めることもできなくはないだろう。しかし、壁塗り代換という現象の特徴を知るために必要なのは、そのような大括りな見方ではなく、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の関係性と、「甘い」のような通常多義語における意味間関係性が、どのように異なるのかを詳らかにすることだと思われる。このような認識に立ち、次の4節で、両者の違いを考察する。

4. 交替動詞と多義語の違い

4.1. 交替動詞

まず、この4.1では、交替動詞について検討する。

2節で述べたように、壁塗り代換の～ニ～ヲ形 (e.g., 壁にペンキを塗る) と～ヲ～デ形 (e.g., 壁をペンキで塗る) は、それぞれ位置変化と状態変化を表し、意味類型が異なる。しかし一方で、3節で述べたように、一見、同義に見えるほど意味が近く感じられること (別義とするには似すぎていること) も確かである。では、この、「意味類型が異なると考えられる一方で、ほとんど同じことを表しているようにも見える」という、一見矛盾した特徴を、どのように理解すればよいのだろうか。

本稿では、「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は、現実世界の同じ事態を指示しつつ、それを別の類型に当てはめて (前者は位置変化として、後者は状態変化として) 述べている、という関係にあるのだと考える。同一事態を指示しているのに、同じことを述べているように見えるが、一方で、その事態をどのようなタイプの事態として捉えているかが異なるので、格体制が異なるのだと考えられる。

「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の関係に関する本稿の考え方は、以下に引用する奥田 (1976) や井島 (2005) の見解と、基本的に共通するものと思われる。

- (13) 表現される現実がひとしいということは、その連語の内部構造の同一性を意味しはしない。前者 (引用者注: 「くちびるにべにをぬる」を指す) がとりつけの構造であるとすれば、後者 (引用者注: 「べにでくちびるをぬる」を指す) はもようがえの構造である。

(中略)

連語の内部構造のちがいは、現実のきりとり方のちがひ、きりとってきた現実の側面の強調を意味する。おなじ現実は言語のがわからことなる風に意味づけられて、それらの中からひとつを選択することは、はなし手にゆだねられている。 (奥田 1976:9)

- (14) このことが意味していることは、人間が外界の現象を認知するには、限られた数の認知の枠組というものが前もって用意されており、それを現象に当てはめて現象を類型化することによってどのような種類の現象であるかを理解するものと考えられる。もちろん、現象によって当てはめやすい枠組というものがあられると思われ、典型的な場合には一つに限られるだろうが、「壁塗り」のような場合は、〈変化〉の枠組も〈移動〉の枠組もどちらも当てはめ可能な中間的な現象であるのであろう。 (井島 2005:68)

上記(13)(14)では、壁塗り代換を、同一事態が位置変化としても状態変化としても類型化される現象として捉えている (奥田 1976 の「とりつけ」と「もようがえ」、井島 2005 の「移動」

と「変化」は、それぞれ、本稿の「位置変化」と「状態変化」に相当する)。本稿の考え方も、これらと同じである。

3 節で触れたように、「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」では、前者が部分的、後者が全体的という解釈になりやすいとされるが、これも、意味類型の違いに由来する解釈の傾向として説明できるだろう。つまり、「～ニ～ヲ塗る」も「～ヲ～デ塗る」も、現実世界の同じ事態(液体などを物の表面になすりつけて広げる、というような行為)を指示しているが、「～ヲ～デ塗る」は、それを、「(壁などの)状態変化」として捉えた表現であるために、「(壁などの)全体に行為が及ぶ」という解釈になりやすい、ということなのだと考えられる。これに対し、「グラスに水を満たす」と「グラスを水で満たす」の場合は、どちらも「水を注いでグラス全体に行き渡らせる」という意味になり、行為の及ぶ範囲に関して解釈の違いが生じない。これは、行為の及ぶ範囲に関して指定を持たない「塗る」とは異なり、「満たす」の指示する事態は、全体に行き渡らせる行為であるからだと考えられる。指示対象が全体に行き渡らせる行為であるため、その事態を位置変化と捉えて述べるか状態変化と捉えて述べるかにかかわらず、また、文脈等に左右されることもなく、常に「全体的」という解釈になるのである。

ところで、壁塗り代換を、上記のように、「同一事態が2通りに類型化される現象」と捉えた場合、次のような疑問が生じるかもしれない。それは、「ある出来事を見て「壁にペンキを塗っている」とも「壁にペンキを付けている」とも言える、といったケースと壁塗り代換とは、どのように区別されるのか」という疑問である。

このような、「塗る」でも「付ける」でも描写できる」といったケースと、壁塗り代換との違いを理解するには、本稿のいう「事態」が、特定の事態ではなく、事態の集合を指すという点を押さえる必要がある。そもそも、どのような語であれ、語が指示するのは特定の個体や特定の事態ではなく、事物の集合や事態の集合である(たとえば「机」という語が指すのは、特定の個体ではなく、「机」という語で指示し得る全ての事物の集合である)。これは、交替動詞であっても同じである。したがって、壁塗り代換における「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の関係を、より厳密に述べるなら、「同じ「事態の集合」を指示しつつ、「～ニ～ヲ塗る」はそれを位置変化として、「～ヲ～デ塗る」はそれを状態変化として捉えている」という関係にあるといえるだろう。

これに対し、「塗る」と「付ける」の関係はどのようなものだろうか。「塗る」が指示する事態の集合と、「付ける」が指示する事態の集合は、明らかに異なる。ただし、この2つの集合には、部分的な重なりがあり、そのため、個々の事態によっては、「塗る」でも「付ける」でも表現可能ということが起こり得るのだと考えられる。

以上のように、「塗る」でも「付ける」でも描写できる」のような事例は、異なる集合間の部分的な重なりによって起こる事例であり、壁塗り代換のような、2つの形式(「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」)が同一の集合を指示する現象とは明確に区別される。

本節の最後に、語が表す意味の違いを「現実世界の指示対象の異同」と「意味類型の異同」とに分けて整理した上で、交替動詞の特徴をまとめたい。2つの異なる意味があった場合、そ

これらの意味どうしの関係は、通常は次のいずれかであると考えられる。1つは、「置く」と「入れる」のような関係であり、「指示対象は異なるが、所属する意味類型は同じ」という関係である（「置く」が指示する事態の集合と「入れる」が指示する事態の集合は異なる。しかし、どちらの事態も位置変化に属す）。もう1つは、「置く」と「汚す」のような関係であり、「指示対象が異なり、所属する意味類型も異なる」という関係である（「置く」が指示する事態の集合と「汚す」が指示する事態の集合は異なる。また前者の事態は位置変化に属し、後者の事態は状態変化に属す）。これに対し、「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の関係は、上記のいずれとも異なり、「指示対象は同じだが、意味類型が異なる」という関係にあるのだと考えられる（「～ニ～ヲ塗る」が指示する事態の集合と「～ヲ～デ塗る」が指示する事態の集合は同一だが、前者はそれを位置変化に属す事態として捉え、後者はそれを状態変化に属す事態として捉えている）。これを以下の(15)に示す。

(15) 「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の関係

	現実世界の指示対象	意味類型
「置く」と「入れる」	異なる	同じ
「置く」と「汚す」	異なる	異なる
「～ニ～ヲ塗る」と 「～ヲ～デ塗る」	同じ	異なる

4.2. 多義語

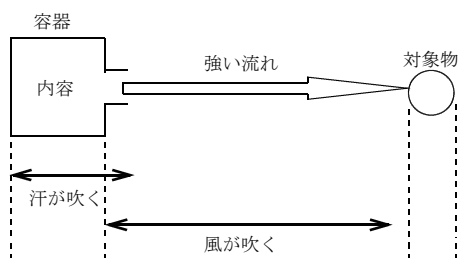
4.1 で述べたように、「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は、「同一事態を指示しつつ、それを別の類型に当てはめて捉えている」という関係にあると考えられる。指示対象が同じであるために、両者は、一見、同義に見えるほど、意味がよく似ているのである（なお、前述のように、本稿の言う「事態」は特定の事態ではなく、その語によって指示し得るあらゆる事態の集合を指す。以降の議論でも同様である）。

これに対し、多義語における意味間関係とは、どのようなものだろうか。3節で触れた「甘い」の場合、「(味噌が) 甘い」が指示する事態は味覚の領域にあり、「(娘に) 甘い」が指示する事態は態度の領域に存在するから、両者の指示する事態は異なる。ただし、この2つは類似点を持ち、前者は味覚の刺激について、後者は態度の厳しさについて、その度合いが弱いことを表している（小出 2003 等）。このように、互いに類似した別の事態を指示する点が、「甘い」という語の多義の内実だと考えられる。類似点を持つが別の事態であり、同一事態ではない、ということがポイントであり、交替動詞との違いである。多義語の各意味が、互いに「別義」と認識されるのは、それぞれが別の事態を指示しているためだろう。

上記の「甘い」の事例は、メタファーによる意味拡張として分析される多義の事例であるが、これとは異なるタイプの多義についても見てみたい。「吹く」という動詞は、「汗が吹く」のよ

うな発生の意味や、「風が吹く」のような気体の移動の意味など、いくつかの意味を持つ多義語であるが、国広(1994)は、これらの意味どうしの関係を、次のように説明している。まず、「吹く」という動詞は、容器から内容物が放出され、それが強い流れとなって空間を移動し、対象物がある場合にはそれにぶつかるまでの全過程を表すとする。そして、この過程のうちの、「容器からの内容物の放出」の段階に焦点を絞ったのが「汗が吹く」であり、「空間の移動」の段階に焦点を絞ったのが「風が吹く」と説明する(国広 1994 では「吹く」にさらに多くの意味を認めているが、ここではそれらについての説明は省く)。国広(1994)は、これらを、次のような図で示している。

(16) 「(汗が)吹く」と「(風が)吹く」



(国広(1994:39)の図4をもとに作成)

このように、国広(1994)は、「吹く」の多義のそれぞれを、一続きの事態の別の段階を焦点化したものと捉えている(なお、この国広 1994 の分析は、靱山 2001 等の認知意味論の研究において、メトニミーによる多義の事例として位置づけられている)。

以上の国広(1994)の分析を踏まえると、「(汗が)吹く」が指示する事態と「(風が)吹く」が指示する事態は、別の事態だといえるだろう。両者はそれぞれ、「容器からの放出」、「空間の移動」という、別の事態を指示し、ただし、この2つの事態は、一続きの大きな事態の構成部分という形で、関連を持つのである。先の「甘い」の事例と同様に、「(汗が)吹く」と「(風が)吹く」も、関連する別の事態を指示するのであり、同一事態を指示するのではないのである。

以上のことから、「(味噌が)甘い」と「(娘に)甘い」、「(汗が)吹く」と「(風が)吹く」のような、一般に多義と言われる意味間の関係と、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の関係とは、明らかに異なるといえる。多義語の各意味の異なりが、指示対象の異なりにあるのに対し、壁塗り代換における「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の異なりは、指示対象の異なりではなく、指示対象の類型化の異なりにあるのである。以下の(17)にこれをまとめる。

(17) 交替動詞と多義語の違い

交替動詞：「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は現実世界の同一事態を指示している。

両表現の意味の違いは、その同一事態を位置変化として捉えているのか、状態変化として捉えているのか、という点にある。

多義語：多義語の各意味が指示する事態は、関連はするが同一事態ではなく、別の事態である。

これが、本稿の冒頭に示した(6)の問いへの回答になる。

なお、3節では、「塗る」という動詞に、「～ニ～ヲ塗る」(位置変化)や「～ヲ～デ塗る」(状態変化)が表す塗布の意味に加えて、「土、漆喰などをなすりつけて、塀・壁・壇などを築造する」という築造の意味があることに言及したが、これらの意味どうしの関係性についても、上記(17)に沿って、次のように理解することができるだろう。

(18) 「塗る」が表す意味間の関係

①塗布の意
a. 位置変化用法 e.g., 壁にペンキを塗る
b. 状態変化用法 e.g., 壁をペンキで塗る
②築造の意 e.g., 壁を塗る (※壁を造る、の意)

①と②の関係：指示対象が異なる(多義関係)

① a と① b の関係：指示対象は同一だが意味類型が異なる(交替関係)

上記(18)に示したように、①と②の違いが、指示対象の異なりにある(①は塗布行為を指示し、②は築造行為を指示する)のに対し、① a と① b は、「指示対象が同一で、意味類型が異なる」という関係にあると考えられる。

5. 本稿とは異なる見解

壁塗り代換や英語の *locative alternation* (壁塗り代換に相当する英語の現象)³ を取り上げた研究の中には、「焦点の移動」によってこれらの現象が成立すると考える研究がある。4 節の

³ *locative alternation* とは、英語に見られる、次のような統語フレームの交替現象である。

(i) a. Jack sprayed paint on the wall.

 b. Jack sprayed the wall with paint. (Levin 1993:51 (125))

上記(i a)の統語フレーム(*into/onto* 形)と(i b)の統語フレーム(*with* 形)は、それぞれ、日本語の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形に相当する。また、これらの文はそれぞれ位置変化と状態変化を表すことが Pinker(1989)等によって指摘されており、この点でも、*locative alternation* と壁塗り代換は並行的な現象であると考えられる。

議論を踏まえると、本稿は、そうした研究とは異なる見解をとることになる。本節では、このことについて詳しく説明し、4節で述べた本稿の主張を明確にしたい。

壁塗り代換や *locative alternation* の成立原理について、岸本(2001)は、「〈行為〉 → 〈移動物の動き〉 → 〈場所の結果状態〉」という「行為連鎖」を想定した上で、このうちの、〈移動物の動き〉の部分を中心化しているのが「〜ニ〜ヲ形」(英語では *into/onto* 形)であり、〈場所の結果状態〉の部分を中心化しているのが「〜ヲ〜デ形」(英語では *with* 形)であると論じている。西村(2002)も、*locative alternation* について、「XがYをZに移動させることによって、Zに状態変化をもたらす」という「フレーム」を想定した上で、このうちの、「YのZへの移動」の局面を中心化しているのが *into/onto* 形であり、「Zの状態変化」の局面を中心化しているのが *with* 形であると述べている。どちらの研究も、壁塗り代換(あるいは *locative alternation*)を、一続きの事態の別の段階や局面が中心化されることで成立する現象と捉えるものであるが、4節の議論から明らかなように、本稿の見解は、こうした見解とは異なるものになる。岸本(2001)や西村(2002)では、「〜ニ〜ヲ塗る」と「〜ヲ〜デ塗る」が、それぞれ別の事態を(一続きの事態の別の段階や局面を)指示すると考えるのに対し、前述のように、本稿では、4節における多義語との違いに関する議論を踏まえ、「〜ニ〜ヲ塗る」と「〜ヲ〜デ塗る」は同一事態を指示すると考える。また、岸本(2001)や西村(2002)では、1つの動詞が2つの異なる事態を指示することによって(一続きの事態の別の段階や局面を指示することによって)壁塗り代換が成立すると考えるのに対し、本稿では、同一事態が2通りに類型化されることで壁塗り代換が成立すると考える。岸本(2001)や西村(2002)の主張する「焦点の移動」は、壁塗り代換ではなく、むしろ、先の「(汗が)吹く」と「(風が)吹く」のようなタイプの多義語の事例に当てはまるものであり、壁塗り代換はそれとは異なる原理で成立するというのが、本稿の見解である。

なお、西村(2002)では、さらに、*locative alternation* について、「村上春樹を読んだ」のようなメトニミーと同じ原理で成立するという見解が述べられている。具体的には、*locative alternation* もメトニミーも、「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象(西村 2002:99)」であるとされている。

本稿の見解は、西村(2002)のような、壁塗り代換(あるいは *locative alternation*)をメトニミーと同じとする考え方とは、大きく異なるものである。メトニミーは、ある事物を指示する語が、それと隣接関係にある別の事物を指示するのに用いられる現象であるが、ここで重要な点は、本来の用法で指示される事物と、メトニミー用法で指示される事物は別の事物である、という点である(「村上春樹」の例で言えば、「村上春樹に会った」のような本来の用法は人物を、「村上春樹を読んだ」のようなメトニミー用法は作品を指示しており、指示対象が異なる)。

これに対し、4.1で述べたように、壁塗り代換の「〜ニ〜ヲ塗る」と「〜ヲ〜デ塗る」は、同一事態を指示すると考えられる(指示対象は同一だが、それをどのような種類の事態として捉えているかが異なる。英語の *locative alternation* についても同様である)。この点において、壁塗り代換は、1つの語が複数の指示対象を持つメトニミーの事例とは、原理的に異なる現象

であると、本稿は考える。

6. まとめ

交替動詞が位置変化と状態変化の 2 つの意味を持つことは従来から指摘されてきたが、「それでは交替動詞は多義語ということなのか」「違うとしたら、交替動詞と多義語とは、具体的にどう異なるのか」という問題が議論されることはなく、曖昧なままだった。本稿ではこの点を追求し、交替動詞と多義語に以下のような違いがあることを指摘した。

(19) 交替動詞と多義語の違い (= (17))

交替動詞：「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は現実世界の同一事態を指示している。

両表現の意味の違いは、その同一事態を位置変化として捉えているのか、状態変化として捉えているのか、という点にある。

多義語：多義語の各意味が指示する事態は、関連はするが同一事態ではなく、別の事態である。

既に述べたように、交替動詞も「関連する複数の意味を持つ語」ではあるから、この点を以て多義語に含めることも、できなくはないだろう。しかし、そのような大括りな見方では、交替動詞と多義語に上記(19)のような違いがあることが見逃されることになる。本稿では、「関連する複数の意味」と言った時の「関連」のあり方にまで踏み込んだ議論を行うことで、多義語とは異なる、交替動詞の特徴を明らかにした。

引用文献

- 安平鎬(1996)「自動詞文における格の代換について—「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に—」『日本語と日本文学』23, 筑波大学国語国文学会
- 井島正博(2005)「変化動詞文の格構造」『日本語学論集』創刊号, 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 奥田靖雄(1976)「言語の単位としての連語」教育科学研究会国語部会(編)『教育国語』145, 麥書房
- 奥津敬一郎(1980)「動詞文型の比較」國廣哲彌(編)『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店
- 奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127, 国語学会
- 川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換を中心に—」『筑波日本語研究』2, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 川野靖子(2002)「自動詞文における二種類の代換現象と所有関係—「N₁ ガ N₂ デ～」と「N₁

- 「 N_2 ニ〜」の違いを中心に」『日本語文法』2-1, 日本語文法学会
- 川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象一格成分の対応の仕方」『日本語の研究』2-1, 日本語学会
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』5-4, 日本語学会
- 川野靖子(2016)「壁塗り代換は、なぜヴォイスのカテゴリーに入らないのか」『埼玉大学紀要 教養学部』51-2
- 川野靖子(2017)「 $\left[\begin{array}{l} \text{「グラスから水を空ける」} \\ \text{と「グラスを空ける」} \end{array} \right]$ —離脱型壁塗り代換の分析—」『埼玉大学紀要 教養学部』52-2
- 岸本秀樹(2001)「壁塗り構文」影山太郎(編)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 岸本秀樹(2007)「場所格交替動詞の多義性と語彙概念構造」『日本語文法』7-1, 日本語文法学会
- 國廣哲彌(1980)「編者補説」國廣哲彌(編)『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店
- 國廣哲彌(1982)『意味論の方法』大修館書店
- 国広哲弥(1994)「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』106, 日本言語学会
- 小出慶一(2003)「味覚形容詞—体系とその意味拡張—」『群馬県立女子大学国文学研究』23
- 定延利之(1993)「深層格が反映すべき意味の確定にむけて—対称関係・対称性を利用して—」
仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 高見健一・久野暉(2014)『日本語構文の意味と機能を探る』くろしお出版
- 西村義樹(2002)「換喩と文法現象」西村義樹(編)『シリーズ言語科学2 認知言語学Ⅰ: 事象構造』東京大学出版会
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味用法の記述的研究』秀英出版
- 武藤彩加(2001)「味覚形容詞「甘い」と「辛い」の多義構造」『日本語教育』110, 日本語教育学会
- 榎山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明他(編)『認知言語学論考』1, ひつじ書房
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- Fukui, Naoki, Shigeru Miyagawa and Carol Tenny. 1985. Verb classes in English and Japanese: A case study in the interaction of syntax, morphology and semantics. *Lexicon Project Working Papers* 3. Cambridge, MA: Center for Cognitive Science, MIT.
- Iwata, Seizi. 2008. *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kageyama, Taro. 1980. The role of thematic relations in the *spray paint* hypallage. *Journal of Japanese Linguistics* 7.
- Kawano, Yasuko. 2019. A critical review of English locative alternation studies : Proposal for

- distinguishing between alternating and non-alternating verbs. 『埼玉大学紀要 教養学部』54-2.
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語大辞典 第二版』
(第10巻) 小学館

日本語学会編(2018)『日本語学大辞典』東京堂出版

付記 本稿は、科学研究費補助金(基盤 C, 課題番号 18K00605)による研究成果の一部である。